

宮本輝の研究

——文学作品に見られる生と死と幸福の問題——

桂 久美子

目次

はじめに

第一章 宮本輝作品にみる生と死について

第一節 「螢川」

第二節 不安神経症と肺結核

第二章 再生について

第一節 「ドナウの旅人」

第二節 「ここに地終わり 海始まる」

第三章 生きる歓びについて

「朝の歓び」

おわりに

はじめに

人間にとつて、最も基本的な生きるといふことを考えた時、その底には必ず死がある。私は、宮本輝の作品に触れることによって、このことを知った。

作品中に、様々なイメージなどによって、生と死が示され、作品

を読み終わった時に、心の中に生と死を感じ、生きることについて自分自身を見つめ直すことができた。

人間には生と死があり、出会いと別れがある。それは、肉体的な生と死だけではなく、精神的な生と死も含まれる。さらに出会いと別れは、人だけでは無い。ものとの出会いや別れもある。そのものとの出会いが人を生かすことがある。

人が生きるとはどのような事なのか、宮本輝の作品を通して考えてみたい。

第一章 生と死について

第一節 「螢川」

宮本輝の作品においての生と死について、まず宮本輝の代表作である『螢川』を取り上げる。

『螢川』は、北陸富山を舞台に、「雪」「桜」「螢」の三部で構成されている。その中では、中学三年生の主人公、竜夫の淡い恋や、竜夫の親友の突然の死、父親への反発、そして、竜夫の母千代の心の格闘や決意、父親の死が描かれ、結末の螢の乱舞により幕を下ろ

す。『螢川』にはいつも暗さが漂っており、この全編での暗さが螢の光を増幅させているように思えてならない。

全編を包む暗さの原因は雪である。まず、生と死について述べる前にこの雪に触れておきたい。

『螢川』の舞台、富山は、言うまでもなく北陸の雪国だが、宮本輝にとって富山の雪は特別である。それは暗く、灰色の雪だ。決して真白で美しくまばゆいばかりの雪ではない。

随筆「わが心の雪」の中で富山の雪についてこう述べている。

私が富山での生活を経験したのは十歳のときの、それもわずか一年間だけのことであるのに、私の内にこやみなく降るつもる雪は、あの富山の鉛色の雪であって、他のどの雪国にもない独自のものである。雪が降り始めると、街は次第に鉛色に変わっていく。身を屈めて歩く人も、家々の屋根も、空も、校舎も古びたビルも、市電も市電のレールも、さらには人々の営みまでも鉛色になっていく。そんな記憶が、鮮明に私の心に残っている。

作者は、父の事業のために、三月の吹雪の中富山にやってきた。小学四年生になろうとする頃である。しかし、父の事業は思うようにはいかず、山のようになった借金を背負って、翌年の四月、当時通っていた富山市立八入町小学校の級友たちに別れをつけることもできずに、夜半、元住んでいた大阪へ慌ただしく帰ることになったのだ。そんな作者の経験が、雪の暗さにも影響している。では『螢川』ではどうだろうか。

一年を終えると、あたかも冬こそすべてであったように思われる。土が残雪であり、水が残雪であり、草が残雪であり、さ

らには光までが残雪の余韻だった。春があっても、夏があっても、そこには絶えず冬の胞子がひそんでいて、この裏日本特有の香気を年中重く澱ませていた。

この鉛色が、この作品の初めから終わりまでのイメージである。とても暗く、沈んでいて、どこか汚れた印象をうける。そして、この雪が作品全体を包んでいることによって、この作品を暗く重いものにしていく。

『螢川』の主人公、竜夫は、英子への淡い恋や、同じように英子を好きだった親友、関根圭太の死、を経験し、さらに、五十二歳でできた自分を溺愛した父親の死を経験する。親友の死と父親の死がまたさらにこの作品を暗いものにさせる。そして竜夫は父親の死に伴って大人の世界に出ていかざるを得なくなる。

その母千代も、夫重竜の死によって、自分の肩に夫の残した借金やこれからの親子の生活がのしかかってくる。親子は明日からの生活さえ難しくなるのだ。そして、実の兄である喜三郎が富山に訪ねて来る。喜三郎は大阪で商売をしており、そこへ千代も来ないかという。もちろん、竜夫のことも責任を持つと千代を説得するが、兄に心からの信頼を寄せている訳ではなかった。なぜなら兄は商売を始める時に重竜に金を借りたという義理があるにもかかわらず、義理の兄弟にあたる重竜の葬式に顔さえ見せることもなく、初七日が明けて二日もたつてからやってきて、自分の商売の自慢話をするような人間だったからである。兄は、二軒目の店を出すに当たって、最初の店で働く体のいい働き手がほしいだけだったのだ。そんな兄について、大阪に行つていいのだろうかとか千代は悩む。

そんな状況の中、七十五歳になる銀蔵という大工と、竜夫の五年

来の

四月に大雪が降ったら、その年こそ螢狩りに行こうという約束が、果たされることになる。銀藏の年齢からいっても最後のチャンスの螢狩りである。

「降るのよ螢が。見たことなからう？ 螢の群れよ。群れっちゅうより、塊りっちゅうほうがええがや。(中略)とにかくものすごい数の螢よ。大雪みたいに右に左に螢が降るがや」

この螢を見るために銀藏と竜夫と千代、そして竜夫の憧れる英子の四人が螢狩りへと出かける。四月の大雪が降った年にしか出ないという螢の大群を見るために。

一生に一度見ることができなにかという螢の大群には、歩いてても歩いてもなかなか出会えなかつた。

「千歩、歩こう」

とそれまで一度も口をきかなかつた竜夫が言った。

「千歩行つて螢がでんだらあきらめて帰るちゃ」

「千五百歩目に出たらどうするがや」

と英子がなげなげに答えたのでみんな笑つた。

「よし千五百歩まで歩くちゃ。それで出んだらあきらめるがや。それに決めたぞ」

千代の心にその時ある考えが浮かぶ。この千五百歩に人生をかけることにする。千五百歩進んでもし螢が出なかつたら、富山に残り、賄い婦をして息子を育てる。もし螢が出たら、喜三郎の話のつて大阪へ行く。この人生の分かれ道を、螢に出会うという運命に賭けるのだ。

そして四人は、あと千五百歩とそれぞれこのころの中で数えなが

ら歩き、螢の大群に出会う。

(前略) 月光が弾け散る川面を眼下に見た瞬間、四人は声もたずにその場に金縛りになった。まだ五百歩も歩いていなかつた。何万何十万もの螢火が川のふちで静かにうねっていた。そしてそれは、四人がそれぞれの心に描いていた華麗なおとぎ絵ではなかつたのである。

千代が螢にこれからの人生を託して、それに答えたかのように螢が現れるというのは、出来すぎており、現実性のない夢のように思える。しかし宮本輝はそういう作家のようだ。宮本輝の作品には必ず希望や光がある。暗く沈んだ色彩の物語であるにもかかわらず、小さな希望は、決して消えない。それは闇の中に光る螢のようだ。但し、その希望や光はただ明るいただけのものではない。四人がそれぞれ思い描いていたおとぎ絵ではなかつた螢のように、希望として見えたものとは、違つたものであつたりする。

螢は強風にあおられ、まき上げられて、英子にまわりつく。そしてざあざあ音をたてて波打つ。竜夫は、何万何千万の螢たちが英子の体の奥深くから絶え間なく生み出されているかのように思う。作者は、田辺聖子との対談の中で、この『螢川』のことを、「本当の目の前を飛んでる螢じゃなくて、自分の中に持っている螢」と言っている。自分の中に持っている螢は、絶え間なく生み出され、絶え間なく死んでいく。

死は、考えても考えても、体験してみないとわからないものである。しかし、人は必ず死を迎える。限りある命なのだ。だからこそ死を考え、そこから生を考える。宮本輝作品に死の臭いがいつも漂うのは、このことが根底にあるからなのだ。

これまで「螢川」を包む暗さについて、その中の希望について述べたが、螢の光は希望であり、闇は死であるといえる。

螢の大群は、滝壺の底に寂寞と舞う微生物の屍のように、はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の激と化し、天空へ天空へと光彩をばかしながら冷たい光の粉状になって舞いあがっていた。

螢は、夜の深い闇の中で浮き上がる生命を象徴している。天空へ天空へと舞い上がる螢は、交尾し、次の生命を生み出して、はかなく生命消えるものである。同じように人の生命も、このように生と死を繰り返す。螢の乱舞は生と死の縮図であるともいえる。さらに、螢の最後の乱舞を屍と表現していることに生命のはかなさが描かれている。

(前略) 螢火は数条の波のようにゆるやかに動いていた。震えるように発光したかと思うと、力尽きるように萎えていく。そのいつ果てるともない点滅の繰り返しは何万何十万と身を寄せ合って、いま切なく侘しい一塊の生命を形づくっていた。

いつ果てるともない点滅の繰り返しは、人間一人一人の生命の繰り返しであり、それが何十万と身を寄せ合っているのは、人間社会全体を示している。そしてそれは、とても切なく侘しい光景である。その侘しい光景を際立たせているのは、その周りの深い闇である。暗い暗い闇は、螢の光を増幅させる。闇が暗ければ暗いほど、その光は、まばゆくはつきりとする。生と死も同じである。人は死を深く考えれば考えるほど、生のきらめきを知る。「螢川」を包む暗さや闇や、人々の死などのイメージが、全てこの螢の光を、増幅させている。このことは、そのまま、死によって初めて生がはつきりと

示されているということを表している。

ここで、宮本輝が強く影響をうけた父について触れておきたいと思う。

宮本輝(本名は宮本正仁)にとつて父の影響は大きい。父にとつて正仁は四十八歳になってからの初めての子だった。これは「螢川」に描かれている竜夫と重竜の関係によく似ている。

正仁の父、宮本熊市は、四十八歳で生まれた正仁を溺愛する。降つて湧いたように生まれた正仁は、赤ん坊のころ腺病質で、母親は毎日病院通いに明け暮れたという。宮本輝は現在でも、父が、病弱な幼い自分を膝に乗せて何度も

「死なんとなつてや、大きいにさえなつてくれたら、他には何にも望まんざかいなア」
(随筆「父のくれたもの」)

と言つたことを、思い出すという。

正仁が生まれた頃、熊市は自動車部品を扱う事業を手がけ、かなりの成功を収めていた。終戦後二年が経過した頃に正仁が生まれたのが、当時熊市は神戸の高級住宅街に住み、豪勢な生活をしていた。ところが、正仁が成長するにつれて、事業は暗転するようになり、幾つかの事業を起すが思わしくなかった。正仁が九歳の時、事業のため大阪を離れる。しかし先に述べた通り、これもうまく行かず、その後も事業がうまく行くことはなかった。そして歳をとり、あちこちに借金を作つて、いつしか別の女のもとに入りびたりになり、正仁が二十二歳のとき、精神病院で七十歳の人生を終えた。父、熊市に精神的異常があつたわけではないが、ちゃんとした病院に入れる金がなく、錠のついた鉄格子のある病院で死んだのだった。

宮本輝は、不遇な晩年を送つた父の姿を、幾つかの随筆に書いて

いる。自分を溺愛してくれた父の哀れな死は、宮本輝にとって、死というものを考えさせるに十分であつたらう。

随筆の中で宮本輝は父親のことをこう書いている。

父という存在にある特別な思いを抱くようになったのは、私が小説を書くようになってからである。(中略)私を溺愛し、どんな人間でもいい、ただ大きくなって欲しいと念じつづけてくれた人がこの世にあつたということ、筆舌に尽くしがたい感謝の念で思い起こすのである。(随筆「父がくれたもの」)

宮本輝は、父からもらった数限りないものを懐におさめて小説を書いていると語る。

父が自分を深く愛してくれたこと、その父の生きる姿と死んでいく姿が、作家、宮本輝に生死を描かせる原点となつているのだらう。宮本輝の世界に、『流転の海』と『地の星』という作品がある。

この作品は、父と子を題材としており、『流転の海・五部作』の第一部と第二部であるが、その先は現在まだ完成していない。作者は二十世紀のうちには完成すると言っている。『流転の海・五部作』には、父からもらった限りないものが、小説化されていくに違いない。そこには、やはり人間の生と死というものが描かれるであらう。

第二節 不安神経症と肺結核

人間にとって病気というものは、生と死を考えさせるきっかけになることが多い。宮本輝にとつてもそれは同じだつたらう。宮本輝が生死を描く原因となつたであろうこの二つの病気について述べておく。

まず一つ目の病気は不安神経症というノイローゼである。作者はこの病気については、随筆「命の力」に詳しく述べられている。

二十五歳のとき、突然奇妙な病気にかかった。電車の中で、強い眩暈と動機と不安感に襲われて、それ以来毎日、その発作に苦しめられた。その発作がやって来ると、全身は鳥肌だち、冷や汗が流れ、息が苦しくなり、今にも死んでしまうような恐怖に包まれてしまう。ノイローゼの診断が下り、症状は日に日に強くなり、休職する。何か月かの休職ののち、復職したが、たちまち再発。いつ襲ってくるか知れない発作に怯えながら、仕事をつづける。(随筆「命の力」)

不安神経症にかかった時、作者は、サンケイ広告社の企画制作部に勤務し、コピーライターをしていた。しかし、二十二歳に就職し、仕事を始めてから半年もたない頃から、自分の仕事の偽善性と一過性に悲哀と空しさを感じるようになったという。仕事のせいでノイローゼになったという訳ではないのだから、とにかく一人で外出することもできず、毎日死の恐怖と発作の恐怖によって休職せざるを得なくなる。何か月かの休職中、作者は昔読みあさつた文学書をもう一度読み直したという。日々の死と発狂から逃げるかのよう、文学に身をうずめていったのだ。

私のかかった「不安神経症」という病気の二大特徴である死の恐怖と発狂の恐怖は、この病を経験したことのない人には断じて理解出来ぬ程に激烈なものである。私は絶えず死を考え、ために強く生を考えるようになったと言ってもよい。

何か月か後に、病気は少し良くなって、復職するが、たちまち再発し、休職中に胸の中でなんとなくもやもやしていた「小説家になる」

という考えが、かたまつていった。ある日の仕事帰りにふと立読みした文芸雑誌のつまらなさに、これなら俺にも書けると作家になることを決意する。

(前略)俺なら、もつとおもしろい小説を書いて見せる。そう思ったのである。こんな病気にかかって、俺はもう廃人とおんなじだ。サラリーマン生活をつづけていくことは不可能だ。ましてや一銭の資本もない俺には、焼きイモ屋すら営むことは出来ない。小説家になるしか、もう俺には生きる道はない。若気の至りと病気の成せる技である。

(随筆「命の力」)
作者には既に妻も子もあつたが、後先も考えず辞表を出し、小説家を志す。

不安神経症という、死の恐怖と発狂の恐怖におびやかされて、『泥の河』や『蜚川』が生まれた。不安神経症という病気の持つ特有の死の恐怖は、宮本輝の作品に大きく影響している。常に作品中に生と死が様々に顔を見せるのも、死を根底とした生の描き方も、宮本輝が死の恐怖を強く感じたことが一因なのだろう。

次に、もう一つの病、肺結核について述べてみることにする。
宮本輝が肺結核と診断されたのは、一九七九年(昭和五十四年)一月十日、宮本輝三十一歳、ちょうど一年前、『蜚川』で芥川賞を受賞し、『夜桜』『道頓堀川』、『幻の光』と、次々に作品を発表し、これからという時である。

肺結核による病巣が生まれたのは、不安神経症にかかるのと同時期ごろと思われ、就職して半年後ぐらいには、すでに右胸鎖骨下あたりに結核の病巣が生まれていたという。入院する約八年ほど前からということになる。気づかないうちに、ゆつくりと、しかし、確

実に病は進行していたのだ。

昭和五十四年の新年早々に、肺結核にかかって入院した。しかし、自分が胸をやられているなど感じたのは、それより三年程前『泥の河』を書いている最中だった。

(随筆「蟻のストマイ」)
自分が何かの病に冒されているのをはつきりと自覚していながらも、ここで倒れたらおしまいだと、病院にも行かず、懸命に小説を書きつづけたのだという。そして友人との約束の旅行へと出発する上野駅で吐血する。しかし、その旅行を楽しみにしていた友人に病気を打ち明けられずに、旅行を続け、旅行後、意を決して病院へ。すると即刻入院、まあ一年は覚悟するやうにとのことであった。

結核といえは、死の病とされていたが、今ではもう一昔前の時代遅れの病気というイメージがある。しかし、現在でも再発の確率は高く、薬が発達したとはいっても、やはり死の病で、結核病棟は、なかなか切ない場所であり、口をきく元気もなくなつてしまいうらい。

最新のあらゆる治療をほどこしながら、なお快方に向かない一部の患者を見ていると、まず何よりも病気を直すのは当人の生命力、自然治癒力に負うところの多いことを、ある厳肅な事実として思い知らされ、自分はひよつとしたらなくすしに滅んでいく部類に入っているのではなからうかと不安にかられる。

(随筆「闘病記」)
それは単調で不安な、焦りだけにせきたてられる生活だった。以前、結核で同じベットにいたというおじさんの「快食、快眠、快便」という病気を治す秘訣に従つて、小説のことなどすっかり忘れて、

精進したという。

五月の十日、一年の予定の入院を、幸運にも、四カ月で終える。

四カ月間、何をしてすごしていたのかといえば、ただ流れ去っていく雲の姿と樹木が芽ぶいていくさまだけを見ていたのである。

(隨筆「關病記」)

と、四カ月の入院生活をつづるが、果して、それだけであろうか。

「ここに地終わり 海始まる」に次のようにある。

「私、十八年間、ずっと雲ばかり見てたようなもんよ。私が十八年間のあいだに見たのは、雲のかたちの変わりかただけかもしれない。——」(中略)

「ちっちゃな綿雲みたいなのが、すうっと消えていく瞬間で、すぐきれいな。私、雲が消えていく瞬間を、何万回も見ただわ」

(「ここに地終わり 海始まる」)

「ここに地終わり 海始まる」の主人公志穂子は六歳からの十八年間の結核の療養生活を送っていた。その十八年を振り返って、父に語り、自分の十八年間を何だったのかと、激しく泣きながら訴える。そんな娘に、父は十八年間が無駄だったなんてことはない。あの十八年間が志穂子をとんでもない素敵な人間にしたとやさしく言う。

宮本輝は、作家としてこれからという時に結核病棟へ入院した。そこで人間の生きる姿と死を見ていたのだろう。結核病棟で見たもの、感じたもの、そして出会いは全て無駄ではなかった。

(前略) 俺は、志穂子が見た雲を見なかった。雲しか見なかったって言ったな? でも志穂子、お前はそのことで、他の人が十八年間で学ぶことよりも、もっと大きく深いものを知ったに違

いないよ。いまは、それがどんなにすごいことなのかわからな
いだろうけど。(後略)

(「ここに地終わり 海始まる」)

これは、志穂子の父の言葉だが、作者自身が自分の結核の療養中、雲しか見ていなかったといったことと、重なる。確かに、雲しか見ていなかったかも知れない。ただし、その雲は、この病にかかつて見ていたからこそ意味あるものであって、普通に何事もなく生活する私たちには見えないものだろう。時に、雲は形を変え、人の生きる姿や、死んでいく姿となり、そんな雲を見て、宮本輝自身、生と死を見つめ直したのではないだろうか。

第二章 再生について

第一節 「ドナウの旅人」

これまで、宮本輝の作品にみる生と死について、宮本輝の経験した病気に触れて考えてきた。生と死は切り離せないものであり、生を見つめる時、同じように死を見つめ、死を深く考えれば、生のきらめきが見えてくる。そのような生と死が、いつも不変のテーマとして宮本輝の作品にあるといっている。

そこで宮本輝は、生と死という永遠のテーマの下に、小説家として何をさらに描こうとしているのか探っていききたい。

『泥の河』『蜚川』『幻の光』等の初期作品は、生と死というものを真正面から描いているといっている。これら初期作品が生と死の文学とすれば、『錦繡』以降の作品は、再生の文学といえる。死を深くみつめたからこそ、生が見えてきた。その見えてきた生を描く。人々の生きる姿を描く。果して、生きるとは、どのようなことな

のだらう。起きて、物を食べ、寝るといふ繰り返しが生きることなのだろうか。

ここで、再生について、人間の生きる姿を描く二作品を取りあげることにする。

まずは『ドナウの旅人』についてだが、『ドナウの旅人』は自殺志願者の旅の物語である。四億六千万円というかかえきれない借金を背負った三十三歳の男、長瀬が、もうどうしようもなくなつて自殺を志願し、高飛びをする。その時、十七歳も離れた五十歳の日野絹子を連れていく。絹子には夫も娘もあつたが『ドナウ河に沿つて旅をしたい』と言ひ、夫を捨てて旅に出る。これがこの小説の始まりである。この後、物語は、ドナウ河に沿つて進んでいく。

母、絹子の手紙によつて、そのことを知つた娘、麻沙子は、父に内緒で母を止めるためにヨーロッパへと旅立つ。

麻沙子は以前、ドイツにいたことがあり、ドイツ人のシギイこと、ジークフリート・パスという青年との恋愛と結婚の断念という過去があつた。親友、ペーターによつて二人の愛は再燃し、シギイは麻沙子を助けることとなり、母のカップルを娘のカップルが追いかける。

レーゲンスブルグで、娘が母に追いつてしばらくした頃、はじめて、長瀬の自殺という旅の目的が明らかになる。麻沙子は必死に帰国させようと説得するが、絹子は「黒海から昇る朝日が見たい」と言ひ張る。自殺志願者の長瀬と絹子を放つておけない麻沙子とシギイは、共にドナウ河の最後、黒海までの旅へ行くことを決意する。旅は、事件に巻きこまれて、波瀾を含みながら、ドナウ河に沿つて続いていく。旅を続けるにつれて、長瀬の自殺のための旅も再生

への旅へと変化していくこととなる。川が様々に変化するように人も変化する。再生への旅へと変化したことは、長瀬が旅の途中、不安神経症らしき病氣にかかったことからわかる。死のうとしてゐる人間はノイローゼにはかからない。生きようとすることからこそノイローゼになるのだ。

そして、シギイや麻沙子にとつても、人生の中での大切な、出会いと別れを多く得ることとなる旅となつた。

絹子にとつてこの旅は、人生の全てであつたといつてもよい。決して楽しいだけの旅ではないが、五十年間生きて来た中で、最も絹子が輝いていた旅であつた。それは長瀬が自分を必要としてゐると感じていたからだつた。この旅の中で、絹子は、五十歳にして、精神的に大きく成長する。ドナウの上流から下流に進むに従つて、絹子は、他が驚くほどに精神的成長をする。

そして、ドナウ河の旅の終点スリナで、絹子は、突然の死を迎える。絹子は、黒海から昇る朝日を見ることのないまま、死んでいく。絹子にとつて、この旅は、長瀬との愛という生きる価値のある旅だつた。絹子は、この旅ほど生きてゐることを感じたことがなかつた。絹子は死の直前に生きることを知るのだ。

宮本輝は、『ドナウの旅人』や川三部作（『泥の河』、『螢川』、『道頓堀川』）に代表されるように川を題材にすることがよくある。また、海も多い。

川や海は、絶え間なく、変化していく。その水の集まりは、何度も循環を繰り返す。

川は水の集まりである。海も泉も皆、水である。水は、雨となり

土にしみこんで、やがて集まり小さな川となって、汚れたり、曲がったり、いろいろなものを飲みこんでいく。いくつかのせせらぎが合流し、大きな流れとなって海へと注ぐ。そしてまた、海によって浄化され、水蒸気となってさらに雲になり、雨と変わる。川は水の無限の循環の一部なのだ。

人間も無限の循環を繰り返している。とすると、山から流れ出た川は、人生であり、様々なものを経験し、吸収して、やがては海に至るように死に至る。そして、どこかでまた生まれ変わる。生と死の繰り返しなのではないだろうか。

宮本輝の随筆「川」に、

自分の中のせせらぎと大海をつなぐと、結局そこには始めなければ終わらない。

とある。自分の中のせせらぎと大海をつなぐものが人生なのだろう。私たちの川は、途中で、枯渇しない限り海へ注いでいくのである。そしてそれが、生きることなのだ。

第二節 「ここに地終わり 海始まる」

再生について、二つ目の作品として『ここに地終わり 海始まる』をあげるが、先に触れたように、主人公、天野志穂子は六歳からの十八年間に北軽井沢の結核病棟で過ごした。彼女は、結核によって療養生活を強いられていたのだ。志穂子の右肺の病巣はどんな新薬を使っても好転しなかった。長い期間の療養生活は、彼女から生命の力を奪っていた。もう仕方がない、手術をする以外に方法はないと医師たちが判断しかけていた頃、志穂子の体に奇蹟が起こった。

結核による肺の影が引き始めたのだった。

この奇蹟には原因があった。それは、ある一枚の絵葉書である。梶井克也という、見も知らずの男性からの一枚の絵葉書が彼女の病気に奇蹟をおこした。

いまポルトガルのリスボンにいます。きのう、ロカ岬というところに行つて来ました。ヨーロッパの最西端にあたる岬です。そこに石碑が建っていて、碑文が刻み込まれています。日本語に訳すと、〈ここに地終わり、海始まる〉という意味だそうです。大西洋からのものすごい風にあおられながら、断崖に立つて眼下の荒れる海に見入り、北軽井沢の病院で見たあなたのことを思いました。あしたトルコのイスタンブールへ行きます。一日も早く病気に勝ってください。

この見ず知らずの男からの絵葉書のラブレターを受け取って、志穂子の中に奇蹟が起きた。この絵葉書が、志穂子に生命の力を与え病気を治すきっかけとなった。志穂子は、長い療養生活によって、生命の力の電源がいつのまにか切れていた。そのスイッチを入れたのが、この絵葉書だったのである。

志穂子は自ら、絵葉書のことを、自分にとつての無自覚な部分での歓喜という。その歓喜が志穂子の体に奇蹟を起こす。

人は、ある一つのきっかけで大きく変わることがある。それは偶然の出来事であることが多い。しかし、実際にはそれは偶然ではなく、必然である。偶然などは存在せず、全ては必然だ。

志穂子は、無事退院し、奇蹟の原因となった絵葉書の差し出し人に会いに行く。二十四歳で初めて一人で電車に乗り、梶井克也を探すところから退院後の志穂子の人生が始まる。ダテコと知り合い、

尾辻とも出会い、志穂子の周りは急激に変化していく。

梶井克也からの絵葉書は、本当は、別の女性への物だった。このことを知って、志穂子はショックを受けるが、その絵葉書が自分に奇蹟を起こした事に変わりはない。

志穂子は、初めて人を愛することを知り、その苦しみや喜びを心から味わう。そうして、生命をきらめかせていく。しかし、十八年間の療養生活を忘れることはできないし、自分の体に自信を持つには、あと十年は必要だった。

「志穂子の本当の人生が、十年後の、三十四歳で始まったって、少しも遅くはないじゃないか」

父の言葉に、志穂子は、生まれて初めて、強く歯向かった。

「遅いわ。三十四歳から始まつてるなんて。あんまりにも遅すぎるわ。(中略)私は病気をなおすだけのために生まれてきたの？」

自分はどうして生まれてきたのか。何故このような不公平を受けなければならぬのか、何度も自問自答しながら、それでも志穂子は前向きに生きていこうとする。

宮本輝は、随筆「潮音風音」の中の「人間の力」と、随筆「生命の力」の中でそれぞれ同じ言葉を引用している。

「生命の力には、外的偶然をやがて内的必然と観ずる能力が備はつてゐるものだ。それは宗教的である。」

これは小林秀雄の「モオツアルト」の中の一節だという。とする、志穂子にとって、結核という不幸を背負うという外的偶然も、見ず知らずの男から送られてきた絵葉書も、外的偶然ではなく内的必然だったということになる。そしてそれは、自らの命の力による

ものである。本当は偶然などというものはない。偶然と思われた絵葉書は、送られるべくして送られてきた必然であったし、結核にかかること自体も必然であった。だからそれが宗教的なのだろう。

志穂子だけでなく、私たち人間は、だれしもがこのような宿命を持ち、それを受け入れる命の力を持つていたのである。

再び生きる。これは結局、どうということなのか。何が死んで生き返ることなのか。死ぬとはどういうことなのだろう、と私の中で繰り返して考えてみた。「ドナウの旅人」でいうと長瀬が立ち直つて生きることに、『ここに地終わり 海始まる』では志穂子が病気を治し、退院して様々な経験をしていくこと、これが再生であるのだろう。長瀬も志穂子も、死の淵に立つて、死を深く知つてから、そこから立ち直つて生きようとする。もし長瀬に四人でのドナウの旅がなかったら、本当に死んでしまつていただろうし、志穂子に絵葉書が送られてこなければ、結核病棟のベッドで、窓の外を眺めるだけの生活が続いていただろう。

心が死ぬということ。現在には、死んだ心のまま生きている人が多いように思える。その死んだ心から再生するにはどうすればよいのだろう。

第三章 生きる歓びについて

『朝の歓び』

宮本輝は、文学のテーマについて、「人間にとって、真のしあわせとは何か、ということである」と言う。

但し、現実には厳しく、悲しいことや辛いことがあふれている。そ

んな現実の中で、何を幸福と考えるのか。どのように生きるのか。宮本輝は、生きる歓びをテーマに作品を描いている。

『朝の歓び』は、そんな人間にとっての幸福について描かれている。

「幸福になるために生まれたのに、どうして物事を、不幸に、ややこしく、複雑にしていくんだろう。」

「過去は消えるの？」
と日出子は訊いた。

「悪い過去は消えるんだ。そうでなきゃあ、人は生きてはいけない。」
（『朝の歓び』）

『朝の歓び』の主人公江川良介は、妻を亡くし、会社を辞めた。彼には昔、妻とは別の女性がいた。それが小森日出子である。彼は、日出子と別れた後で日出子のことを友人に話したために、彼女から仕事を奪ってしまった。彼は、そのことを悔いていたし、日出子に会いたかった。妻が死んで、昔の愛人と会おうだなんて、と自分を蔑みながらも、彼は日出子に会いに行く。

日出子と良介は、イタリアへ旅行することになる。その旅行の中で二人は生きることについて、幸せについて語りあう。

旅の途中、良介は、ローマのスペイン広場で、一晩も雨に濡れて坐っている木内さつきという女に出会う。さつきは、新婚旅行の途中だというのに、男に置いてけぼりにされ、一文無しだった。このさつきとの出会いが良介にとって生きることを考えるヒントとなる。

東京に帰ってからも、良介は生きることについて考える。

『朝の歓び』の登場人物は全て、前向きに生きようとする。そし

て、生きることにについて語り合う。

「逢ったり、別れたり、終わったり、始まつたり、消えたり、あらわれたり……。人間の縁てのは不思議だな」

と、良介がつぶやくと

「生きてるってこと自体が、とても不思議で神秘的なことだと思っんです。」
（『朝の歓び』）

と、さつきが答える。そして良介は、さつきの「生きているときが朝で、死んでいるときが夜」という言葉から何かを見いだそうとする。

ここで言う生きているときとは、心が生きているときである。決して肉体的なものではなく、精神的なものだ。朝、人は目を覚まし、夜、人は眠る。体は、朝も夜も呼吸し、生きている。しかし、夜、眠っている時には意識は無い。

このことと同じように、人も一日という短い期間でなくも長い期間をかけて朝と夜を持つている。心が生きている時が朝、心が死んでいるときが夜なのである。

例えるなら、『ここに地終わり 海始まる』の志穂子に絵葉書が来るまでの療養生活が死であり夜、無自覚な部分での歓喜を得た後が生であり朝ということになる。

死が生に変わる時、朝の日の出のような、何かのきっかけが人には必要である。それは生きる歓びにあたる。志穂子にとっての絵葉書のようなものだ。

良介の心は死んでいた。妻が死んで、働きもせず、生命保険でイタリア旅行をしていた間もずっと夜のままだった。

しかし、人の生きる姿に触れて、自分も何かを始めようとした時、

突然心に朝がやってきた。

朝はいつか夜になり、夜は、いつか朝になる。この繰り返しは、想像も及ばない時間の中で行われてきたのだ……。

俺のなかには、電池もガソリンもゼンマイも入っていない。

それなのに俺は、生きて、笑って、哀しんで、飲んで、考えて、怒って、動くことができる。(中略) みんなそうなのだ。みんな幸福になりたいと思っている。幸福の基準は、それぞれ異なっても、生きているということのなかにすべての基準はあるのだ。良介はそう思うと、また胸の奥にうずきを感じた。生きていることに、これほどの喜びを感じたのは、初めてだった。

〔朝の喜び〕

良介は生きていることに喜びを感じる。自分が何かを始めようとして前を向いた時、生きる喜びを知る。人はやはり、顔を上げて、前を向かなければ、生きることはできない。

作者はあとがきに

初めもなければ終わりのない小説として創りあげたかったのですが、その中で生きることの喜びに触れている気配を感じていただけたら、それが〈作者の喜び〉となるでしょう

〔「朝の喜び」あとがきより〕

と書いている。人間にとって、生きることそのものが幸福である。そう感じる事が生きる喜びであり幸福である。それを作者は、私たち読者に伝えているのかもしれない。

現在、地球の環境は破壊され続け、人口は過密化し、心の病は増える一方で、終わりの見えない戦争が存在する。これから五十年先

私たちは、何をしているのかと考えると、暗く絶望的な気分さえなる。そんなこれからの人類に、文学は、生きる力を与えることによつて、人を再生することができる。宮本輝は、そう考えているのだろう。

これまで、宮本輝の作品の中での生と死について、どのような描き方をされているのか、また、生と死は何かということから始まって、死のイメージ、作者の病氣などを根底とした再生、幸福、生きる喜びについて、述べてきた。

宮本輝のこれまでの作品を初期、中期、後期に分けるとするならば、初期で生と死を、中期で再生を、後期で生きる喜びを描いてきたといえる。これからの宮本輝を考えてみても、人間にとって最も大切な、生きるということ、生きる喜びを見つけ出すことをテーマにするのだろうと思われる。

おわりに

人が生きるとはどのような事なのか。人はそれぞれ別々の人生を歩む。ある人にとっては、何とということのない風景であつても、別の人にとっては、一生忘れられない風景であつたりする。一人一人、大切な何かがあるはずだ。

普段の何げない生活の中から、生きる喜びを見つけないから生きる。そうすることによつて、人はもつと幸福になれるだろう。人は、幸福でなければならぬ。幸福は偶然やってくるものではない。必然的なものだ。自らが自らの幸福を作り出す。このことを心にしっかりと

りと刻みこんで生きることが自分を幸福にする。

参考文献

。宮本輝全集 第一巻～第十四巻

新潮社

。『地の星』

新潮社

。『ここに地終わり 海始まる』

講談社

。『朝の歎び』

講談社

〔評〕

宮本輝の作品全体を見渡し、その根底にある作品の本質に正面から立ち向った好論文であった。第一章で生と死の問題、第二章で再生の問題、第三章で人生の歎び・幸福の問題を取り上げたことは、宮本輝の作品の本質を論ずる上で、的確であったと思う。現代作家には珍しい、人生根本の問題を描き続けている宮本輝の文学は、他の作家の作品に比して、大変魅力的であり、かつ宗教的ですからある。

桂さんが、これら宮本輝の作品に魅せられたのは、桂さん自身が、人生の本質と正面から向き合っている証拠でもある。作品をよく読み込んだ、実感の込めた論文であったと思う。

(宇野 憲治)